

道心



禅昌寺通信「道心」第38号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室

発行 平成22年8月1日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail : zenshoji@hicat.ne.jp

ホームページ <http://www.zenshoji.org/>

暑中お見舞い申し上げます

酷暑の夏を迎え、過ごしづらい日々が続いて
おりますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こういうときには環境問題、特に地球の
温暖化が身にします。かといって

冷房なしでこの夏を乗り切れるかというと、
この私も自信がありません。

そして冷房の使用が更に温暖化に拍車を掛ける
という悪循環をつくってしまう一人となっています。

人間は、生きるためとはいえ、便利さと利益を追求し、例えば鯖の養殖などでは、
鯖の稚魚をエサに養殖が行われてきたため、天然の鯖の稚魚が著しく減少し、とうとう
養殖自体も窮地に追い込まれつつあると聞きます。こういった悪循環を平気でつくって
しまう我々人間の業の深さは測りしれません。

我々人間の所業を振り返り、戒めざるを得ない自己に気づき、仏教徒としての生き
方を学び、本当の意味での支えとなる十六条の大戒を授かるのが授戒会であります。

来る十月に厳修される授戒会について、様々な方法での参加を多数お申込頂きました
ことに感謝すると共に、皆様と共に素晴らしい授戒会が修行できますよう更に精進して
参ります。

禅昌寺住職 横山泰賢 合掌





光を伝えた人々

—よき人の歩かれたあとかたを尋ねて—

薬は諸刃の剣で 毒ともなる

愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊 導師

從容録 第六則 馬祖白黒

衆に示して云く、口を開き得ざる時、無舌の人語ることを解す、
脚を擡げ起さざる處、無足の人行くことを解す。
若し也た他の殻中に落ち、句下に死在せば、

愷に自由の分あらん、四山相逼る時、如何か透脱せん。

挙す。僧、馬大師に問う、四句を離れ、百非を絶して請う、
師某甲に西來の意を直指せよ、大師云く、我れ今日勞倦す。
汝が為に説くこと能わず、智蔵に問取し去れ。

僧、蔵に問う、

蔵云く、何ぞ和尚にと問わざる。

僧云く和尚来たつて問わ教む。蔵云く、我れ今日頭痛す、

汝が為めに説くこと能わず、海兄に問取し去れ。

僧、海に問う。海云く、我れ這裏に到つて不会。

僧、大師云く、蔵頭白、海頭黒。

頌に云く、薬の病と作る、前聖に鑑む。病の医と作る、

必ずや其れ誰ぞ。白頭黒頭、克家の子、有句無句、截流の機、

堂堂として坐断す舌頭の路、応に笑うべし毗耶の老古錫、

「花は咲いたら散る」ことに気づく

時は盛唐、楊貴妃の色香に酔い、半
世紀近くも君臨していた王位を退かね
ばならなくなつた玄宗皇帝の御代。洪
州の開元寺に馬祖道一禪師という方が
住せられ、おおいに禪風こよう挙揚し
ておられた。その傘下に学ぶ者八百と
いわれ、特に傑出したもの八十余人と
伝えられている。虎視牛行、つまり眼
光は虎のようで、歩き方は悠々として
牛の歩むようであつたという。

ある日、一人の修行僧が馬祖さまに
質ねた。

「達磨大師がはるばるとインドから中国
へお伝え下さつた仏法のぎりぎりのと
ころを、言葉や理屈を離れ、端的にお
示し下さい」

言葉や理論を使わずに示せ、といひ
はむつかしい。馬祖さまは答へられた。
「わたしは今日、疲れていてな、お前さ
んに説明することができないのじや。
智蔵和尚にきいてくれ」

そこで智蔵和尚のところへ聞きにゆ
くと、智蔵和尚が「何故馬祖さまに質
ねんか」というので、「馬祖さまが貴師
に聞けといわれましたので、やつてき
ました」という。さて智蔵和尚、何と
答えてくれるかと待っている。

「私は今日頭が痛くてな、あなたに説く
ことができませんわい。懷海和尚の処
へいつて聞いてくれんか」という。い
われるままに今度は百丈懷海和尚のと
ころへいつて質ねると、和尚曰く、

「どうもその処は、わしもよくわからんの
じや」

傀儡師にあやつられる人形のようにくる
くるまわされた僧は、再び馬祖さまのとこ
ろへもどつて来て、「智蔵和尚は頭が痛か
ら話ができませんわい、百丈和尚はわしもよ
うわからんといいました」と報告した。す
ると馬祖さまはいわれた。

「蔵頭白、海頭黒」

智蔵和尚は白髪になつており、百丈懷海
和尚はまだ髪が黒かつたのであろう。「智蔵
和尚の頭は白いし、懷海和尚の頭は黒いな
あ」といわれた。つまりこれが祖師西來の
意、仏法のぎりぎりを端的に示した言葉な
んだけれど、さて、あちこちと質ねまわつ
た雲水は、その真意を受け取ることができ
たかどうか。

とにかく仏法は特別のものと思ひ、その
特別のことを学ぶことが、あるいは身につ
けることが、仏法の学びや修行だと勘違い
し、またそうすることのみに生き甲斐を感
ずるというようになつてしまつてゐるが、
そうではない。人生は特別なことや特別な
時はそうあるものでもなく、当たり前のこ
とのすばらしさに気づき、当たり前のこと
を大切に勤めあげる、当たり前の平凡なひ
と時ひと時を大切に生きる、それよりほか
に、人生を輝きのあるものにして生きる生
き方はないのだが。

「谷深うして杓柄長し」という禅の言葉があ
る。深い谷川の水を汲むには柄杓の柄がな
がくなければならない、というのであり、
まことに当たり前の道理である。道元禪師
が中国より帰られ、初開道場として宇治の

興聖寺を開かれたときのお言葉の中に、次のような一節がある。

「山僧叢林を歴ること多からず。ただこれなおざりに天童先師にまみえた、當下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞ぜられず。すなわち空手にして郷に還る。ゆえに一毫も仏法なし。(中略) 朝々日は東より出て、夜々月は西に沈む云々」

私はそれほどあちこちの修行道場を、それも長く修行したわけではない。ただ天童山の如浄禅師というすばらしいお方に出会うことができて、眼は横につき鼻はタテにまっすぐついているという事実が心の底からわかった、胸おちただけであって、そのほかに特別に仏法などというものは何もなく、カラ手で日本へ帰って来ました。朝ごとに太陽が東からのぼり、夜ごとに月は西に沈む、そういう当たり前の道理に目がさめる、気づく、そのほかに仏法などというものはないんだよ、とのお示しである。

花は咲いたら散り、人は生まれたら死ぬ、散った花は枝にもどらず、死んだ人は生きかえらず、人生はやりなおしはできないのだ、この当たり前の道理がなかなかわからないのである。

薬は諸刃の剣で毒ともなる

かつて圧迫骨折で入院した折、病院で出してくれた二種類の薬をしばらく服用していた。一つは痛み止めで一つはその痛み止めの薬のために胃を悪くするから胃の薬だという。つまり薬は諸刃の剣で、よほど注

意して使わないと、健全な機能までもだめにしてしまいかねないということの証拠といえよう。

お釈迦さまは御自分を医者にたとえ、その教えを薬にたとえられた。心を病む多くの人々の良医として、その悲しみ、苦しみ、迷いを聞き、原因をつきとめ、どう生きたらその苦しみを転じて喜びや安らぎを得ることができかを説かれたものが教えとなり、また具体的実践法が戒律となつて後世へと伝えられてきた。

病にに応じて薬が処方されるように、心の病も限りがないから、その為に説かれた教えも限らないものとなり、また罪を犯す人間が増える度に戒律の数も増し、時代が下がるほどにその教えや戒律にしばられて、人々は身動きがとれなくなつてしまった。一つの病を治療するために飲んだ薬の害で、健康な細胞まで働きを失うの類と同じといえよう。

たとえば茶の湯のことなど全く知らないうちは、お茶を飲むのも部屋への出入りも畳を歩くのも、何のこだわりもなく、赤ん坊が飲んだり歩いたりするのと変わらない自然態でやっていたものを、なまじっか作法を学び、知識を得ることで、それが邪魔をし、一服のお茶も幾口で飲むか、茶碗をどうまわすかと迷つて飲むことができず、部屋へ入る足さへも右か左かと迷つて動きがとれないようなものである。学びつくし、学んだことも忘れつくして自在に動けるようにならないと本物といえない。その途中、教えにしばられ動きがとれない、これがまさに薬害と言えよう。

一日に八万四千の煩惱あり
八万四千のみほとけいます

これは青木敬磨という方の歌だという。煩惱の数だけ教えが説かれ、迷える衆生の数だけ、み佛が同じ姿となつて現れ、お救い下さるというのである。

煩惱のしがらみを解きはなつために、説かれた教えにがんじがらめになつて動きがとれない学者や、佛の慈悲の働きの象徴としての仏さま方が、ひとたび仏像の姿をとると、利益を与えたり罰を与える存在として人々の上に君臨し、見はり、立ちほだかるようになるのも同じといえよう。

思想とか主義というものもこの類といえよう。若い頃、本気で仏道を求めるあまり、とこに激しい言動にでたことがあった。そういう私を一部の人々は「アカだ」と避難した。

共産主義の何たるかも全く知らない私を、ただ仏法や僧侶のほんとうの在り方を問うているだけの私を「アカ」と非難する人々に対し、私は一層の腹立ちと失望をおぼえたことを今も記憶している。

時は流れて、人権問題が世論をさらつていく頃、差別の眼で道元禅師の「正法眼蔵」のすべてを読もうとした学者があり、背筋の寒くなるのをおぼえたことがある。

時と処を変えることによつて是非が逆転するようなモノサシはすべて中途半端。思想とか主義もこの範疇を出るものではない。モノサシにしばられて自由を失っていることを、色眼鏡をかけていて、透明に見ることができない自分であることをせめて知ることができたらと思つことがある。

御仏の「うてな」に抱かれて

活かされている己こそ

己の拠り所として生きよう

禅昌寺 東堂 横山 正賢

修証義第三章 授戒入位 第十七節

諸仏の常にこの中に住持たる、各々の方面に知覚を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各々の知覚に方面露れず、この時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預かる輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顕はす、是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ発菩提心なり。

この節は含蓄のある言葉を繰り返されておりますから、解説は難しいところです。大本山永平寺第七十四世佐藤泰舜禅師のご著書「修証義と生活指導」には次のように解釈されています。

「諸仏の常に此中に住持たる、各々の方面に知覚を遺さず」というのを今は「思うて心に跡がない」といいかえて味わってみよう。

それで此の句の終わりの各々の方面に知覚を遺さずというのを中心に理解するのである。各々の方面とは、いちいちの場合とか、あらゆる場合とかいうことであり、知覚とは知ること、判断する、見分けること、そして決断することなど、すべての物事に對して心の働くことである。人間は心の働きの複雑で勝れているところに、万物の靈長としてほこる価値がある。同じ人間でも心の働き方によって、上下の差別がつくほどである。それほどに心の働きは重要なものであつて、同じ一人の人でも、気を使つて心を働かして、いろいろな思いをこらす場合と、ぼんやりして氣ばたらきのない時とでは、その結果が大変に異なるものである。だから人はつとめて、あらゆる場合に氣をくばり、心を働かして、仕事の能率をあげ、する事なす事により良い効果をあげようとするのである。

ところが、今の文中には、知覚を遺さずとある。これはじつに大切なことであつて、この文章の肝心な急所である。心の働きは大切であり、氣を配ることは重要であり、考えること、思うこと、感ずること、すべて肝要なことであつて、如何なる場合にも心の働きがなくてはならぬが、その心が何時までも働いておることは良くない。事が終わつても心だけが残つて、過ぎ去つた事を追つかけていては、次の仕事の妨げになり、心はむだな働きに勢力を消耗して疲れ果てるであらう。

とこのように心の用い方を述べておられ

ますが私は、前号にも引用しておきました「正法眼蔵生死の巻」の一節に、「この生死は、すなわち佛の御いのちなり、これをいといすてんとすれば、すなわち佛の御いのちをうしなわんとするなり。

これにとどまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなうなり、佛のありさまをとどむるなり。いとうことなくしたうことなき、このとき、はじめて佛のところにいる。ただし心をもてはかることなかれ、ことばをもていうことなかれ、ただわが身をも心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなわれて、これにしたがいもて行くとき、ちからをもいれず、ころをも、ついやさずして、生死をはなれ佛となる」とありますように、日常の事事物物に出会つて無心に対処してゆくことはなかなか出来ないことですが、私は最近齢を重ねたせいでしよう、難しいことではないように感じております。私は、

ラインを引いた箇所を何度も繰り返し味わつてみますと次のように感じております。

社会に奉仕し、人様のお世話をさせていただく事は、誰の為でもなく「只つとめさせていただく」佛の御いのちを自分の我欲の為のみ営むと言うことは、佛の御いのちを失うという姿であり。誰のためでもなく、只与えられた命の営みを、ひたすらつとめさせていただくという生き方は無辺に活かされる、命の喜びを味わえるように思います。

勝友の庭

られ、浄土真宗大谷派のご住職であられ、当時姫路学院女子短期大学講師であられた、東井義雄先生から戴いた書簡と小冊子は、その後の私の生き方に確信を持たせて下さったものでした。これをご紹介いたします。

この小冊子を戴いたのは、ご講演戴きお寺にお泊まりいただいた折に、まだ住職として宗教家としても未熟で暗中模索の日々であることを打ち明けたことがありました、その後数日たつてお励まし言葉を添えた、小冊子をお送りいただいたおりました。

東井義雄先生「人生の詩」

野口次男編

小冊子の表紙をめくった次のページの白紙に、先生の直筆で、

自分は

自分の主人公

世界でただ一人の

自分を創っていく

責任者。

東井義雄

横山正賢先生

と、ご染筆下さり。次ページに

根を養えば

樹は

おのずから育つ

と東井先生の教育モットーが掲げられ、次のページに校長を務めておられた小学六年を卒業する卒業生一人一人に贈

られた言葉がつづられてありました。一部をご紹介いたします。

九(苦)をのりこえなければ
十のよろこびはつかめない。
九九を通らなければ
百のしあわせは得られない。

ほんもの と せものとは
見えないところのあり方で決まる。
それなのに せものに限って
見えるところばかり気にし
飾り ますます

ほんとのせものになっていく。

ほめてもらうことも 礼をいつて
もらうこともあてにせず
ただよろこんでもらうことを
よろこびとして 生きる生き方。

ひとりのよろこびは
みんな大きくしてよろこび
ひとりのかなしみは
みんなでわけあつて
小さくして背負いあつ生き方。

この度三十三年ぶりにこの小冊子に再会し、出会いに活かされた人生を感謝する今日このころです。

禅峰

◆道心・趣味の会◆

短歌

- わが黒髪 ゆたけきころの青き恋
昭和もきみもはるかなる記憶
- むくむくと円頂形なる積雲は
宇宙の空間にしばらく止まる

東区 矢野 淑子

俳句

- 蟬時雨やみて人恋ふ眸はいたし
淋しさの空蟬なれば捨てがたし
- 涼しさや城門高き紋瓦

当山二十一世 故 甲田 苔水

- 水屋の旗うなだれていたりけり
草いきれいのちまぶしくありしかな
- ここに居ることの不思議をかたつむり

廿日市市 伊藤 順二郎

◆行事報告◆(五月～七月)

- この間取り上げるほどの行事はありませんでした。
然しお寺では十月の法要に向けて準備に追われております。
お授戒会へのご参加をお勧めしましたところ、多数のご参加の申し込みを戴き山内一同安堵し感謝いたしております。

◆行事案内◆(八月～十二月)

- 孟蘭盆会法要
八月六日(金) 午前十時半より
孟蘭盆会施食供養法要・法話
- 九月三十日木曜日に開催を予定しておりました青山俊董老師講演会は都合で休止いたします。
変わりに十月十六日午後三時より、青山俊董老師による、「佛の十六条戒」についての法座が御座います。
聴講を希望されるお方は詳細について禅昌寺へお尋ね下さい。
- お受戒会十月十三日～十七日
二十三世退董式十月十六日
二十四世晋山式十月十七日
ご家族お揃いでご参加下さるよう改めてご案内をいたします。
- 第十回「TSUKIMI IN 寺」
十月二十三日 土曜日
恒例のエリザベト音楽大学教授大代啓二先生のフルートと昨年お越し戴いた箏曲家沢口一恵先生のご希望で今年は琴とフルートの共演となりました。
- 第四回 西国三十三観音霊場巡り
十一月十一日木曜日～十二日金曜日
第二十番善峰寺～二十七番円教寺・番外花山院まで、参加費参加者二十名として三万七千円(総経費を参加者により割り勘となります。)

- お正月前諸堂大掃除
十二月五日 日曜日 午後一時より
お子さんお孫さんとご一緒にご参加下さい。

臘八摂心坐禅会

- 十二月一日(朝)～八日(朝)まで
午前五時三十分より六時十分まで
午後七時より八時三十分まで
年内の坐禅会は、八日の早朝坐禅をもってお休みします。

上田宗箇流茶道稽古日

- 毎月一回 第二又は第四金曜日の
予定 午後一時から
お抹茶と和菓子を楽しみむ
つもりでご参加下さい。

御詠歌の会

- 第二金曜日午前十時より自主練習
●第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで
◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合もあります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

毎週定例行事

- (八月中の坐禅会はすべてお休みと致します。)

●暁天坐禅会 月曜日～金曜日

毎朝午前五時半～六時十分まで

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半

●婦人坐禅会 毎週金曜日

午後二時より坐禅・茶話会終了三時
(第一金曜日のみ坐禅の後 写経・茶話会)

西国三十三ヶ所観音霊場参拝(第四回)

- 平成22年11月11日(木)～12日(金)
- 集合場所 JR広島駅新幹線口
ホテルグランドパリア広島安閑前
- 集合時間 午前6時50分(時間厳守)

11月11日(木)

11月12日(金)

7:00	広島駅	7:10	不動院前	7:25	広島IC	7:25	山陽自動車道	7:25	宝塚IC	7:25	中山寺	7:25	勝尾寺	7:25	総持寺	7:25	善峰寺	7:25	湯ノ花温泉(泊)
7:00	湯ノ花温泉	7:10	六太寺	7:25	播州清水寺	7:25	一乗寺	7:25	円教寺	7:25	神戸北IC	7:25	山陽自動車道	7:25	広島IC	7:25	中筋駅	7:25	不動院前
7:00	湯ノ花温泉	7:10	六太寺	7:25	播州清水寺	7:25	一乗寺	7:25	円教寺	7:25	神戸北IC	7:25	山陽自動車道	7:25	広島IC	7:25	中筋駅	7:25	不動院前

〈湯ノ花温泉〉
溪山閣〈和室〉
☎(0771) 22-0250
旅費：約37,000円

※旅行代金は参加者数が20名で算出した概算費用です。参加者数の増減により変動しますのでご了承ください。

- 添乗員：同行します
- 食事 朝1回、昼2回、夜1回付き

＝貸切バス
※スケジュールは多少変更になる場合もあります。

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。